

研 究 紀 要

農 業 部 会

主テーマ 生徒の「生きる力」を育む活力ある農業教育の創造と実践

【 第1分科会 】(生産経営・環境創造系)

テーマ 『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教科指導および社会のグローバル化に対応した農業教育、キャリア教育の推進はどうあるべきか』

青森県立柏木農業高等学校	教 諭	木 下 結 貴	1
青森県立名久井農業高等学校	教 諭	佐々木 秀 幸	3

【 第2分科会 】(資源活用系)

テーマ 『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教科指導および社会のグローバル化に対応した農業教育、キャリア教育の推進はどうあるべきか』

青森県立三本木農業恵拓高等学校	教 諭	大久保 実	5
-----------------	-----	-------	-------	---

【 第3分科会 】(学校経営系)

テーマ 『生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営・寮運営はどうあるべきか』

青森県立五所川原農林高等学校	教 諭	越 洋	8
----------------	-----	-----	-------	---

【 全体協議会 】(研修報告)

「食品微生物検査研修に参加して」

青森県立三本木農業恵拓高等学校	教 諭	豊 川 良 昭	12
-----------------	-----	---------	-------	----

【 講 演 会 】

演 題 「八戸にワイン文化を」～新しい価値を日本へ

講 師	八戸ワイナリー株式会社 社 長	亀 橋 進 氏	13
-----	-----------------	---------	-------	----

部 会 の 動 き	15
-----------	-------	----

研 究 テ ー マ	16
-----------	-------	----

紀要編集委員 佐 藤 匠 (青森県立三本木農業恵拓高等学校)

農 業 部 会

【 第 1 分科会 】（生産経営・環境創造系）

テーマ

『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教科指導および社会の

グローバル化に対応した農業教育、キャリア教育の推進はどうあるべきか』

研究協議の視点

- (1)教科指導の展開と評価
- (2)地域人材・資源等を活用した農業経営や6次産業化（商品開発含む）等に対応した学習の展開
- (3)国際交流や特色ある学校設定科目等による教科指導の実践
- (4)先進的（ICT、スマート農業、SDGsなど）で魅力ある農業教育の取り組みの実践
- (5)GAP（農業生産工程管理）、HACCP（危害分析重要管理点手法）を取り入れた農業教育の実践
- (6)他の教育機関（大学・農業大学等）や関係機関等と連携したキャリア教育の推進
- (7)農業教育の活性化につながる学校農業クラブ活動の実践

助言者	青森県立七戸高等学校	教 頭	小笠原 理 高
司会者	青森県立柏木農業高等学校	教 諭	鳴 海 博 方
発表者	青森県立柏木農業高等学校	教 諭	木 下 結 貴
〃	青森県立名久井農業高等学校	教 諭	佐々木 秀 幸
記録者	青森県立柏木農業高等学校	実習講師	高 橋 佳 子

1 発表内容および質疑応答

○青森県立柏木農業高等学校 教 諭 木 下 結 貴

(1) はじめに

青森県はリンゴの一大産地で、平川市がある中南地域は栽培が最も盛んである。令和5年度、本校は中南地域において唯一の農業高校となった。地域に根付いた農業高校となるには、地域特産物に特化した教育はもちろん、産官学連携によってさまざまな結びつきが重要といえる。今回は本校果樹部門における農業教育の実践について紹介していく。

(2) 内 容

① GLOBAL G. A. P. 認証取得

平成27年、同じ津軽地域にある五所川原農林高校が、高校で初のGLOBAL G. A. P. 認証を取得した。それを受け、東京オリンピックに向けて全国の農業高校でGLOBAL G. A. P. 取得の流れが加速した。本校においても青果物リンゴで令和元年度に初の取得をした。令和3年度東京オリンピックにおいて、デンマークボートチームに本校産のふじ・王林の提供を実現した。さらにサンふじを台湾に輸出し、現地で好評を得た。

令和4年度には青森テレビATVの番組「わっち!!」に取材を受け、GLOBAL G. A. P. を担当する「りんご研究部」の特集が放送された。さらに、GLOBAL G. A. P. の国際会議である「Tour Stop in Fujisaki, Aomori Japan 2022」に出席し、メディアにも取り上げられた。GLOBAL G. A. P. は直接付加価値をつけるためのものではないが、高校におけるGAP活動は国際的な視点を醸成させるとともに、大きな注目を集め地域の活性化に貢献しているといえる。

② 高密度栽培の導入・台木育成

近年、リンゴの高密度栽培が注目されている。高密度栽培とは、栽植距離を慣行栽培より短くすることで、早期多収・早期成園化・均質省力生産を実現する栽培手法である。

本校においては、令和3年度より導入準備を進めた。まず平川市経済部農林課に相談し、平川市密植栽培研究会を紹介してもらい、栽培指導を受けられることとなった。また、県内で高密植の苗木育成・販売をおこなう(株)原田種苗にも賛同いただき、本校の活動に協働して取り組んでいます。それに加え青森県内で台木が不足していることを受け、本校圃場における高密植用の台木育成の協力体制も構築することができた。

令和4年度は青森県農林水産部構造政策課協力で、RED APPLE(株)・ジャパンアップル(株)の見学会を実施した。さらに「あおり創造学」事業を活用し、(株)原田種苗・(株)福士農園を視察した。実際の高密植栽培実践園地の視察で、具体的な栽培に関する知識の向上につながった。その後、芳賀信建設(株)に依頼し、高密植果樹棚であるトレリスを設置した。

令和5年度に「リンゴ高密植栽培 植樹式」を盛大に執り行った。長尾忠行平川市長を始めとした平川市役所職員、(株)原田種苗、芳賀信建設(株)、JA青森中央会、密植栽培研究会など、約60名の方にご参加いただいた。平川市密植栽培研究会協力で摘心・下垂誘引講習会を実施し、高密植の栽培技術を学習させた。さらに、(株)原田種苗から高密植の台木提供を受け、本校果樹園において台木の植え付けをおこない、3か年計画で育成して地域の高密植を实践したい農家へ譲渡する計画を進めている。その他にも青森県中南地域県民局、平川市、JA津軽みらい、JA青森中央会など多くの団体に支援いただき活動をしている現状である。

本校の高密植栽培の活動を通して、新栽培技術の認知度を高めるだけでなく、産官学連携によって地域の結束力を向上させ、中南地域の活性化にもつながる取り組みだと考える。

③ 剪定枝の燻製チップへの活用・商品化

果樹生産において、剪定枝の発生は避けては通れない。多くの果樹農家において、剪定枝の焼却処分が当たり前となっており、環境汚染や二酸化炭素の排出が問題となっている。剪定枝の焼却は火事を引き起こすリスクも付き纏うため、活用方法の検討が必要である。そこで、本校では剪定枝を燻製用のチップに加工し、「柏農産チップ」として商品化する取り組みを行った。チップ化は本校でおこない、商品化に向けては地域企業と連携した。加工・調整等は(株)甚八りんご農園、販促方法ならびにパッケージデザイン考案は(株)コンシスと連携して実施した。本研究に関わる諸経費は、青森県教育委員会の事業である令和4年度「ドリカム人づくり推進事業」を活用し商品化に向けた取り組みを進めることができた。

令和5年度はチップ化・加工・調整・袋詰めといった商品完成までの一連の流れを本校でおこない、アウトドア用品店のフェニックスライズで店頭販売する計画を進行中である。剪定枝という「ゴミ」から価値を見出し、商品化まで持っていく未利用資源の活用は今後も継続しておこなっていく。

④ リンゴ菓子の商品開発

令和4年度全国産業教育フェア青森大会に向けて、リンゴとコメを利用した商品を、(有)シャロン甘洋堂と連携し開発した。生地は米粉を使い、リンゴは角切りのものを差し込んだロールケーキを考案した。パッケージデザインとネーミングはアイデアを出し合い、「柏っとロール(ぱつとろーる)」を完成させた。産業教育フェアで「柏っとロール」を試験的に販売したところ、飛ぶような売れ行きとなり、110個の商品は数分で完売した。生地の質や材料の準備等課題は山積しているが、一つ一つ改善していき、地域に長く愛される商品としていきたい。

(3) 質疑応答

(三農) 企業や団体との連携について、担当者が交代しても継続していくためにはどのようなことが必要か。

(柏農) 引き継ぎの内容が幅広くならないよう精査しなければならない。

(三農) 高密植栽培に生徒がどのように関わっているか。

(柏農) 台木の育成では、除草など細かい活動を行っている。また、ポイントを絞りながら生徒に関わらせており、学びを深めたい生徒は上級学校等へ進学している。

(五農) 高密植栽培の課題は何ですか。

(柏農) 初期投資に費用はかかるが補助金の支援もある。栽培面では、苗木の種類によって樹勢が強くなり管理が難しいこと、下垂誘引の作業が、摘果の時期と重なるため作業が分散される。

(五農) 高密植栽培に関連して、多雪地帯での栽培管理の課題は何ですか。

(柏農) 樹や枝が折れやすいので、雪下ろしが必要である。

(五農) 高密植栽培と丸葉栽培を比べて、味の違いはありますか。

(柏農) 糖度・酸度・着色を比べても遜色ないとデータのデータも出ており、個人的には変わらないと考えている。

(五農) GLOBAL G. A. P. の取り組みを実践したことにより、生徒がどのように成長したか。

(柏農) GLOBAL G. A. P. での審査の受け答えやメディア対応など、GAP に対する意識付けを持ったことにより自信につながり上級学校への進路希望を叶えた。

○青森県立名久井農業高等学校 教 諭 佐々木 秀 幸

(1) 学校概要

本校は、青森県南部町に位置し、昭和19年に9ヶ村の組合立として設置され、昭和23年に青森県立名久井農業高等学校に改称され、令和6年度には創立80周年を迎える。県南地方唯一の農業高校として農業・環境・食に関する専門知識と技術の習得を目指している。また、長年、緑化教育を推進し、第二の校則とも言われる「緑育心」のスローガンのもと地域社会に必要とされる力を育成する産業教育を推進している。

現在、生物生産科(A科)と環境システム科(E科)の2学科で構成されているが、各学科とも栽培・経営に関わる教科を重点的に学習している。また、農作業支援活動、地区分会活動などの地域に向いた活動や多くの資格取得等によるアグリマイスター6年連続学校表彰、ストックホルム青少年水大賞国際コンテストグランプリ受賞などの研究活動、国際理解教育も活発に行われている。

本校も、現在は非農家の生徒が多くなってきており、高校入学後にはじめて農業に触れる生徒が多く、農業に対する理解を深め、取り巻く環境を知り、広い視野をもったハイクオリティな人材になれるような学習内容が求められる。

(2) 研究協議の視点

① 教科指導の展開と評価

ア 教科「農業」の視点

農業は、「食料・農業・農村基本法」、「みどりの食料システム戦略」などの法律や行政と密接につながっている。農業教育は、「自然科学」と「社会科学」の分野があり、現在は「知識」「技術」のみではなく、考えるためのヒントや「価値観」を確認することが大事になる。また、各農業教科の科目でプロジェクト学習(ある目的を達成するために期間限定で集められたメンバーによる活動)が明記されている。

② 本校の教科指導の実際

イ 『マッキーノ』の活用

1987年に牧野英一(まきのひでかず)によって発表された、ビンゴゲームを改良した暗記ドリルのことをいう。これを改良して、16マスの専用用紙を作り、基礎的な農業用語や野菜の品種名、農業鑑定競技の出題範囲などの「用語リスト」を指定し、用語を書かせてゲームを行う。授業の始まりに行うことで、座学の授業の始まりに興味関心を持たせて落ち着いて授業を受けることにつながる効果があり、どの赴任学校、学科でも生徒に受け入れられた。用語については、定期考査の選択問題に組み込んでいる。

ウ 『実習シート』での振り返り

農場での実習後、必ず記録を書いている。イメージは、課題研究ファイルの学習日誌(実施内容)を改良して作成した。実習を単なる作業で終わらせるのではなく、実習の中で行った内容を教科書とあわせて学習するように質問項目を設け、生徒はそれに答える。また、生徒自ら実習内容について自己評価を行うことで、客観的に自分の行動について考え、次の授業や実習につなげている。

③ 評価の方法

学習指導を行うとき、それに合わせて評価の方法も考える必要がある。生徒の実態や学習の内容にあわせて選択していく。

評価方法	内 容
質問紙法	質問項目に答えさせる。
テスト法	問題に答えさせ、正解を求める。
観察法	発問に対する発言、行動などを観察する。
作品法	作業の成果、作品、レポートなどを評価。
自己評価法	自己の様子について質問により答えさせる。
相互評価法	生徒の行動について質問により答えさせる。

(3) 地域人材・資源等を活用した農業経営や6次産業化（商品開発を含む）等に対応した学習の展開

本校での「課題研究」の単位数は、全学科ともに2年4単位、3年4単位を設定しており、同学年で同時帯（午後2時間）に構成されている。このことから、各学科を超えた横断的な研究をすることも可能である。テーマはローカルなものからグローバルなものまであり、学科や学年、教科でお互いに連携している。

本校生物生産科野菜班では、地元の伝統野菜である「南部太ねぎ」や「糠塚きゅうり」を研究対象として扱っている。伝統野菜は栽培が難しいうえ、一定の品質が確保しにくく、試行錯誤を重ねている。

伝統野菜の栽培、加工、活用の面で、校内の他研究室だけでなく、生産農家や八戸市農業経営振興センター、弘前大学、郷土料理研究家などと相談・連携をしながらすすめている。情報発信として、自ら本校ホームページに掲載したり、「さんばちファーマーズマルシェ」や「青少年のための科学の祭典2023」八戸大会などの地元のイベントで研究発表を行ったりしている。特に「南部太ねぎ」については、地元のNPO法人なんぶの「達者村」とともに例年「全国ねぎサミット」に参加しており、名久井農業高校の「スクールプロジェクト」としてメディアにとりあげられることが多い。今後も伝統野菜を地域活性の素材として未来を作っていくことにつなげていきたい。

(4) 質疑応答

(七戸)「マッキーノ」を導入する前と導入後の成果について教えていただきたい。

(名農)学力あるなしに関わらずゲーム感覚で行うことができるため、生徒の興味・関心を引き出すことができる。

(名農)他校において、活力ある教育活動がある地域、学科、非農家という面から、どのようにアプローチしているか。

(三農)「きみがらスリッパ」の研究活動を3年間行ったことで、生徒が主体的に行動しコミュニケーション能力が向上した。また、ポスターセッショングランプリや「農家尊熟」を通して、非農家の生徒も農業に興味を持つようになった。

(五農)「フードバングプロジェクト」、「ブランドメロン栽培」、「五農米味しらべの製造」など企業と連携し学習を展開している。また、GLOBAL G. A. P. 認証に取り組みたい生徒もおり、部活的な存在として所属意識を持って活動している。

2 指導助言 青森県立七戸高等学校 教頭 小笠原 理 高

柏木農業高校の木下先生は、りんご高密度植栽培や剪定枝の燻製チップ、リンゴ菓子の商品開発など、地域連携を中心とした取組について発表してくださいました。地域と連携することで学校単独では不可能だった活動が可能になるので、生徒はもちろん職員も生き生きと活動している姿が伺えます。今後意識していただきたい点としては、いずれの活動も外部との連携が一定期間継続されるでしょうから、どちらかに「付き合わされている感」が生じないよう、そして、お互いwinwinの関係が保てるよう、次年度の良い連携に結びつけるための振り返りや評価を欠かさず行っていただきたいと思います。そして継続する際は、単に「今年もお願いします」ではなく、継続する目的を明確に示し、十分に理解を得た上で実施することを強く推奨します。

名久井農業高校の日野澤先生は、効果的な学習を狙いとした「マッキーノ」や「学習シート」等の取り組み、及びそれに関連した評価について発表してくださいました。「楽しいかどうか」は、生徒が学習に向かう上で重要な要素なので、今後も生徒のモチベーションを保てるよう工夫し続けることを期待します。また、評価については、「指導と評価の一体化」と言われるように、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要です。評価のための評価に終わることなく、指導の質を高められる評価となるよう留意してください。

続いて、分科会全体に関することに触れたいと思います。

教科農業には、実験・実習が欠かせませんが、その適切な実施にあたっては、現場を熟知している実習助手の皆さんの準備や調整によるところが大きく、私もこれまで何度となく助けていただきました。日頃の実験・実習が皆さんのおかげで成り立っていることに、改めて感謝申し上げます。ところで、私がこれまでお世話になった実習助手の中で、この人凄いなあと思った方が何人かいらっしゃったのですが、その方たちには共通点があったのでこの機会に紹介させていただきます。それは、「農場の〇〇先生、あんなことも知ってるし、こんなこともできる。」「今日△△先生にこんなこと教えてもらって、あんなことができるようになった。凄い!」ということを、実験・実習を通して生徒に自然に言わせつつ、生徒へ積極的に関わってくださっていたことです。皆さんの

役割は「実験や実習等において教諭を補佐すること」と言ってしまうとそれまでですが、個人的には、今紹介した方たちのように積極的に生徒の指導に関わっていただきたいと思っています。なぜなら、現学習指導要領が目指している「主体的・対話的で深い学び」を実現させるには、生徒たちに様々なモノに触れさせるだけでなく、より多くの人や価値観に触れさせ、生徒が自分で判断して未来を上手に生きていく力を卒業までに身に付けられるよう、私たちがサポートする必要があるからです。また、皆さん一人ひとりにしか無い経験や技術などがあると思います。人生経験を伝えることでも何でも構いませんので、是非積極的に関わってあげてください。

次に、教諭の皆さんに意識していただきたいことは、生徒の自己有用感・自己肯定感を高める指導です。現学習指導要領に移行する際、生徒たちの特徴の一つとして、成功体験や人に褒められた経験が少ない、いわゆる自己肯定感が低い生徒が多いという指摘がありました。しかし、コロナ禍で過ごした約3年間は、成功体験どころか体験そのものが制限されてきました。5月8日以降はコロナが5類に移行され制限が緩和されたものの、世の中が急激にコロナ前に戻っているとは言えない場面もあります。ですから、自己肯定感が低い生徒たちに私たちがしてあげられる方法、その一つは、生徒一人ひとりに対し、「あなたは〇〇ができるようになったんだよ」「□□してくれてありがとう」「その考え方、いいね」というように、褒める機会を意識的に作るのだと思います。また、褒められることは認められることでもあるので、それが積み重なると、生徒と教員との良好な信頼関係づくりにも繋がりますし、信頼関係を構築することで指導上のトラブルを事前に回避することも可能です。とは言え、生徒がなかなか思うように動かないのは重々承知です。しかし、私たちは評論家ではなくて教育者です。何らかの困難を抱えていたり、やりたくてもうまくできなかったり、そういう生徒たちを何とかするために、教員という仕事が必要なのだと思います。ですから、叱ることが10回あったとしたら、11回褒める努力をしながら信頼関係を築いて、よりよい方向へ導いてあげてください。

また、今後各校では、感染症等が急激に広がらない限り、特色ある取組が積極的に推進されることでしょう。その際、教員が生徒に対し、「こういう活動があるんだけど、やってみない？」といった提案をする機会が増えると思いますが、次の3つの条件が揃っていると、だいたいの生徒は提案に乗ってくれる、振り向いてくれると先輩教員に教わりましたので紹介します。それは、①その活動が「楽しいかどうか」②その活動に参加することが「ためになるかどうか」③その活動に参加したことで「周囲に認められるかどうか」です。あくまでも私自身の経験上の話になりますが、共感した方は参考にしてください。

【 第2分科会 】(資源活用系)

テーマ

『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教科指導および社会の

グローバル化に対応した農業教育、キャリア教育の推進はどうあるべきか』

研究協議の視点

- (1)教科指導の展開と評価
- (2)地域人材・資源等を活用した農業経営や6次産業化(商品開発含む)等に対応した学習の展開
- (3)国際交流や特色ある学校設定科目等による教科指導の実践
- (4)先進的(ICT, スマート農業, SDGsなど)で魅力ある農業教育の取り組みの実践
- (5)GAP(農業生産工程管理), HACCP(危害分析重要管理点手法)を取り入れた農業教育の実践
- (6)他の教育機関(大学・農業大学等)や関係機関等と連携したキャリア教育の推進
- (7)農業教育の活性化につながる学校農業クラブ活動の実践

助言者	青森県立五所川原農林高等学校	教 頭	奈良岡 隆 樹
司会者	青森県立三本木農業恵拓高等学校	教 諭	豊 川 良 昭
発表者	青森県立三本木農業恵拓高等学校	教 諭	大 久 保 実
記録者	青森県立三本木農業恵拓高等学校	教 諭	佐 藤 匠
〃	青森県立三本木農業恵拓高等学校	臨時講師	栩 内 里 菜

1 発表内容および質疑応答

○青森県立三本木農業恵拓高等学校 教 諭 大久保 実

(1) はじめに

本校は、明治31年に設立された「青森県農学校」を前身としており、今年度で125年目を迎えた。今年4月に「三本木農業恵拓高等学校」として3学年が揃い、地域と共に歩む新たな一步を踏み出した。学科は、普通科(2クラス)、植物科学科、動物科学科、環境工学科、食品科学科の5つが設置され、569名が所属している。519, 538m²(実験実習地 375, 538m²)という広大な敷地と、長い歴史で培った農業教育を「本校独自の教育資源」とし、「生きる学び」を実践している。

(2) 研究協議の視点

【(7)農業教育の活性化につながる学校農業クラブ活動の実践】

①「主体的・対話的で深い学び」に対応した教科指導

ア. 全校田植え

昭和46年、三本木の地に新農場が移転してから行われている農業クラブ行事で、今年度の実施で第51回目を迎えた。学科対抗の競技形式で行われ、参加する生徒は所属学科のプライドをかけて競技に参加する。機械化、スマート化が進む現在でありながら、手植えにこだわり、十和田市の基幹産業である稲作への理解を深めるとともに「作物」や「農業と環境」で学んだ知識の定着を図っている。

各学科の3年生は、指示役や指導役、縄張りなど役割を分担し、主体的かつ組織的に行事に向かう。特に指導役は、苗の植え方や全体の動きなどを1・2年生に教えるため、「主体的・対話的で深い学び」に直結している。当日も、各学年を均等に配置し、経験の浅い1年生に先輩が指導する。また、真剣に取り組みながらもコミュニケーションを取り合い、連携の取れた組織で競技に挑む。全校田植え事前事後は、各学科で集会を実施する。事前集会ではそれぞれの役割を確認することで「一人一人が主役」であることを実感し、主体的な取り組みへつながっている。事後では、3年生から後輩へ想いを伝える時間とし、対話的な深い学び(社会性)へつながっている。

イ. ポスターセッショングランプリ

「学び会い 学び合う」をコンセプトに実施され、2年生が1年間取り組んだ課題研究の成果をポスターセッション形式で発表する。研究実績をまとめ、発表するため、各学科で学ぶ専門教科の深化を図っている。聴講者は主に1年生であるため、「伝わる」工夫が必要である。また、発表後に質疑応答もあるため、発表者、聴講者ともに広く、深い知識が求められ、教科横断型の活動であると同時に「主体的・対話的で深い学び」となっている。知識が少ない1年生に対して「伝わる」が鍵となるため、発表方法、ポスターデザイン、実物活用などの工夫が必要であり、2年生は組織的かつ総合的な準備が必要となる。

②グローバル化に対応した農業教育、キャリア教育

ア. 農可尊熟(のうかそんじゅく):グローバル化に対応した農業教育

農業の可能性を熟考する会として放課後に開校している。講師役はネットニュースや新聞記事のグローバルな課題を引用し、それぞれが学んだ知識や考えを持ち寄り議論する。立場に関係なく誰でも参加でき、本校学びの集合体となっている。

参加者それぞれが学んだ知識を持ち寄るため、グローバルな幅広い知識の定着や多角的な思考・判断の能力が身に付き、また、自ら考え、表現する力が養われる。さらに、新たな知識の定着は学習意欲を高め、農業教育の活性化に繋がっている。テーマに対して、それぞれの考えを話し合い、各チームで議論、まとめ、発表する。また、各チームの発表へは質疑応答もあり、深い学び結びついている。

イ. ファームナビゲーター:グローバル化に対応したキャリア教育

今年で23年目を迎え、本校を訪れる子どもたちや保護者を案内する活動である。ナビゲーターは登録制で、農業クラブが定めた「さんのう検定」に合格する必要がある。毎年1,000名以上をナビゲートし、農業や自然の魅力や大切さを伝えている。教えることの難しさを生徒自ら感じることで、主体的な学びに結びつき、また、幅広い異年齢集団と関わることで社会の生き方を学ぶとともに職業観の育成にもつながっている。

近隣の保育園、幼稚園、子育て支援センターが来校するため、英語しか話せない園児もいる。生徒は積極的に英語でコミュニケーションを取る。

(3) 質疑応答

- (柏農) ファームナビゲーターについて。登録者はどのように振り分け、保育園等の来校対応をしているのか。
- (三農) 農場部で春に年間の来校予定を取りまとめている。期日が近づいたら、生徒玄関に参加希望者を募る紙を農クで設置し、記入してもらおう形で振り分けている。
- (三農) ポスターセッショングランプリについて。伝わる力の育成は、具体的にどのように指導しているのか。
- (三農) 農業クラブ員全体には未だ指導体制を築けていたとは言えない。しかし、学科単位で言うと、1年生の時点で聴講者として行事を経験しているため、2年生では発表者する立場として、どうしたら伝わるか工夫しなさいと伝えている。専門的な用語の扱い方など、1年生時に分からなかったことは繰り返さないよう指導を積み重ねている。
- (三農) 普通科ができてよかったことは何か。
- (三農) 生徒数の増加。農業は大切である、面白いということをどのように伝えていくか挑戦だと思っている。農林水産省や県庁など、公務員に目を向けて方向性を持って指導できたら。逆に、農業学科は普通科に劣等感を抱いている生徒もいる。大学への進学、コンクール入賞などで自身を持たせ、お互いにより刺激を与えることができれば。また、全校行事を動かすのは大変である。農業学科だけで動くときは大変さを感じる。例えば農業鑑定。場所を体育館から移したため大丈夫だったが。来年度は本校で農業クラブ県大会が開催される。教科「総合と探究」と結びつけて、良い学習機会となるよう進めていきたい。現在は普通科主任が協力的なため大丈夫ではある。

2 指導助言 青森県立五所川原農林高等学校 教頭 奈良岡 隆 樹

本日は発表者である大久保先生、各校の先生方お疲れ様でした。農業高校は多様な生徒がいて、カリキュラムも新しいものとなり、更には業務も多岐にわたり毎日大変な状況かと思えます。あおもり創造学について、農業高校は従前から実施していることであり、うまく組み変えていくとよいと思えます。地域との取り組みも先進的であり、現在GAPは全国で100校を超えています。しかし、業務にはスクラップも必要であり、各校で情報交換をしながら実施して欲しいです。タブレット端末は1人1台整備されました。授業や活動への評価の話がなされていましたが、振り返りは大事です。先生方が生徒に行う評価もありますが、生徒自身がこの活動で何を学んだか、成長したスキルを確認できなければいけません。生徒個人がタブレット端末をより活用できる機会が多くなるのではないかと思います。プレゼン資料を作成し授業の中で議論する場を設けるといったことを、もう少し実施しても良いのではないかと考えます。ポスター発表もスライドに移行して発表するなどよいかと思えます。

また、地域を愛する人材の育成が大事です。各校、生徒数確保にご苦労されています。生活場所の資源発掘も求められると思います。地域に密着し還元する、貢献へつながる取り組みは、視点を変えて実施していくことが必要になるのではないのでしょうか。より科学的なデータを取って分析することが求められます。農業クラブ県大会においても、地域連携は大変良いですが、よりデータが必要かと感じました。慣れない学科や授業の担当になると、実験にも抵抗感があるかもしれません。自力では困難なことも、他者と関わりを持ち、私たち教員も新鮮さと新しい視点を持って、取り組んで良いと考えます。

冒頭ではあおもり創造学の話をしましたでしたが、農業高校は従前より取り組んでいたことです。負担を感じすぎずに取り組み、新入生確保に繋げていただきたいと思います。更なるPRのためにも、地域の特殊性など、新資源の発掘はより必要と感じます。生徒自身が振り返る習慣をつけさせ、自立の一步にいただきたいと思います。農業高校の資源やポテンシャルを最大限使用して欲しいと考えます。本日はお疲れ様でした。

【 第3分科会 】 (学校経営系)

テーマ

『生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営・寮運営は
どうあるべきか』

研究協議の視点

- (1) 学校の特色を生かした魅力ある学校農場の在り方
- (2) 「社会に開かれた教育課程」に対応した農場運営・寮運営
- (3) 地域や関係機関と連携した教育環境（研修，施設設備等）の充実

助言者	青森県立柏木農業高等学校	校長	浅利 成就
司会者	青森県立五所川原農林高等学校	教諭	加藤 佑也
発表者	青森県立柏木農業高等学校	教諭	越 洋
記録者	青森県立五所川原農林高等学校	教諭	青山 恭逸
〃	青森県立五所川原農林高等学校	実習講師	佐藤 遼弥

1 発表内容および質疑応答

○青森県立五所川原農林高等学校 教諭 越 洋

(1) はじめに (学校経営の柱となるもの)

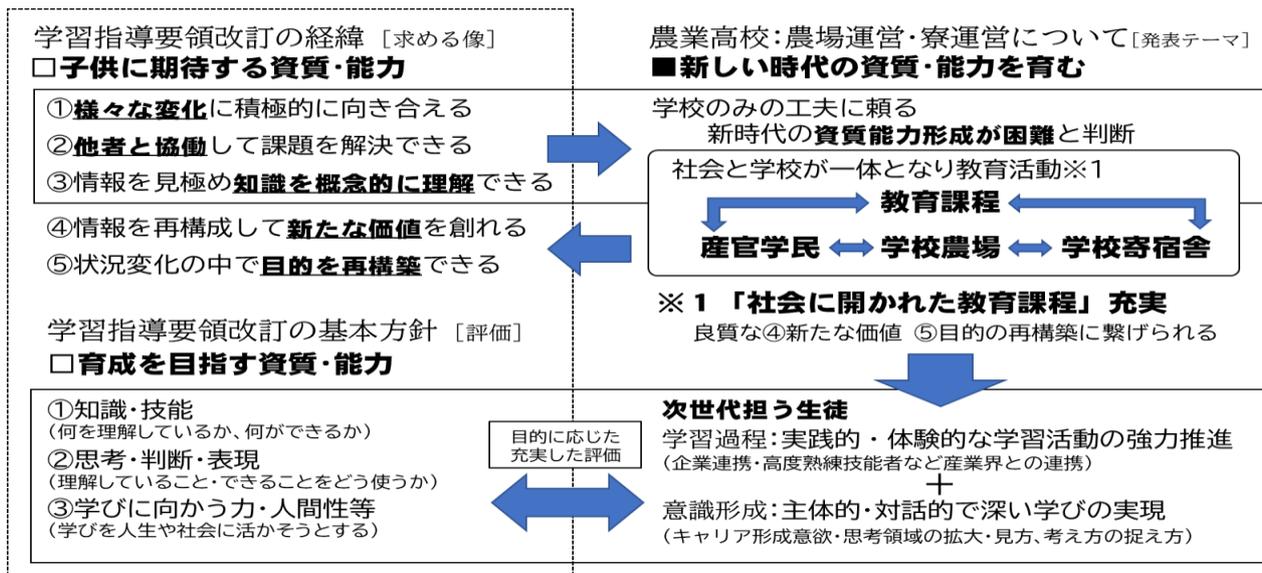
本校は明治35年(1902年)、安定した食料供給を目的に北郡立農学校として設立された。時代は変遷し、食料の安定生産，基盤整備，多面的活用，環境保全型農業，そして現在は高齢・少子化による担い手不足や市場開放による産業維持を根幹(地域課題)に据え教育課程が編成されている。

令和4年度，本校は創立120周年を迎えた。様々な沿革を経て，食品科学科・環境土木科・森林科学科・生物生産科の計4学科で構成されている。生徒数は，297名である。

(2) 「社会に開かれた教育課程」について，学習の位置付け，ねらいは何なのか。

「社会に開かれた教育課程」の位置付けを理解するために，「学習指導要領」のねらいを整理し，「学校経営」を支える農場・寮といった学習環境の活用についてテーマの論点を絞り込みたいと思う。

※学習指導要領・研究協議の視点・学校経営について (フローチャート図)



子供に期待する「資質・能力」を育むために，学校単独ではなく，社会と一体となり教育課程を充実させ，「新たな価値観」を創造できる教育課程が大切となり，その実現に向け，農場及び寮[寄宿舎]の学習環境を活用する取組が求められている。

※「社会に開かれた教育課程」充実

学習: 実践的・体験的な学習活動の強力推進
意識: 主体的・対話的で深い学びの実現



地域・産業界と連携

専門機関
連携活動

「実験・実習の充実」「講習会の開催」
「授業の改善」「インターンシップ活動」
「見方、考え方・捉え方」

「社会に開かれた教育課程」を進めるためには、「実験・実習」「講習会の開催」「授業の改善」「インターンシップ」を教育場面として活用すること。そして、学習活動では、「実践的で体験的」な授業展開により、将来を意識できる「主体的・対話的で深い学び」を実感できるキャリア形成が大切であることが分かった。

(3) 「社会に開かれた教育課程」について、学校農場・施設等を活用した実践事例

※地域・産業界と連携

「実験・実習の充実」「講習会の開催」
「授業の改善」「インターンシップ活動」

「見方、考え方・捉え方」

「食品科学科」

科目: 食品製造
民間: 岩谷精肉店
形態: 特別非常勤講師
内容: 食肉解体の手法を講師の実技をもとに生徒が解体実習を行い、技術力を高める。

「環境土木科」

科目: 農業土木施工
企業: (有)松橋左官
形態: 特別非常勤講師
内容: コンクリート打設について、モルタル・生コンクリートの種類を学習し、打設実習を行う。

「森林科学科」

科目: 森林経営
官庁: 中南地域県民局
形態: 体験学習
内容: 西目屋村の遊休農地に国産漆の増産にむけ、現地に赴き植林体験学習を実施している。

「生物生産科」

科目: 作物
企業: みちのくクボタ
ヤンマーアグリジャパン
形態: 講演・体験学習
内容: スマート農業学習を目的に、本校水田でスマート機器を用いた学習。

教育課程



学校農場



地域企業連携



①安定的な農業生産
②環境保全 ③資源活用

本校での教育活動として、各科の代表的なものを取り上げた。活動では、「見方・考え方・捉え方」を働かせる場面を作り出し、産業人としての「倫理観」の涵養も重視している。

【地域・産業界との連携活動】



「食肉解体実習」食品科学科

食品産業を担える知識を理解するとともに、解体に伴う技術を専門技術者から学び身に付けている。活動を通して、食品産業を希望する意識を育てている。



「コンクリート打設実習」環境土木科

土木技術者として必要な掘削・整地・打設の過程を理解し、整地・打設技術を専門技術者から学び身に付けている。現場指揮官の育成にむけ、基盤整備の基本を学び、概念的な知識習得にも励んでいる。



「津軽漆植林実習」森林科学科

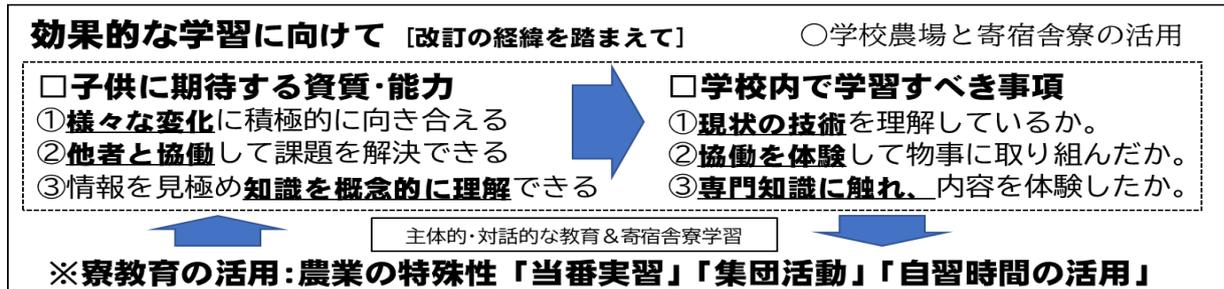
高齢化により放棄されたリンゴ園地の現状と、国産漆の生産価値を理解するとともに、漆植林活動を行うことで林業職への動機を身に付けている。



「スマート農業実習」生物生産科

高齢化により担い手問題が重要視される現状と、農業と ICT 技術の必要性を理解するとともに、水稻栽培のスマート技術に触れることで、将来の経営スキルを身に付けることを目標としている。

(4) 「社会に開かれた教育課程」の充実にむけた、寮[寄宿舎]教育の在り方、実践事例



社会と学校の接点を作り、生徒に充実した「思考・判断・表現」力を育むためには、「知識・技術」に裏付けられた根本的な「資質」を伸ばす必要がある。多角的な観点で「資質・能力」を伸ばすため、寮教育では以下の内容に取り組んでいる。

【寄宿舎：菊水寮での教育活動】

上記の「資質・能力」を伸ばすために、「寮教育の活用①～②」を実践している。①では当番実習活動について、②では自習時間の活動について説明する。

□寮教育の活用①

→実習当番の活用でバックアップ。

当番実習日	月曜日	水曜日	金曜日
実習形態	夕当番実習 ※補充日は金曜日 [15:50～16:30]		朝当番実習 [8:40～授業開始]
実習内容	水田・野菜・果樹 ※それぞれの部門で対応		
生徒割当	3班体制（8～9名1班）		
学習の位置付	実習状況の評価（実習評価簿：時間外総合実習）		

①現状の技術を理解しているか。②協働を体験して物事に取り組んだか。



「夕当番実習の風景」

夕当番実習では、3班体制で、作物・野菜・果樹の部門をローテーションで計画的に実習を行っている。朝当番実習では、1年生生物生産科全員が圃場に集合し、農業と環境の授業と連携させ行っている。基本的に、月曜・水曜が夕当番、金曜日が朝当番として行っている。

□寮教育の活用②

→自習時間の活用で専門性の土台をつくる。

自習時間	月～木曜日（20:10～21:00）
実習形態	生徒居室にて、課題ファイルを学習する
自習内容	農業鑑定学習・農業技術検定学習 (範囲に従って専門的知識をプリント学習) (教科書をもとに基礎基本を定着)
生徒割当	各個人の取組（2名1部屋）
学習の位置付	学習状況の評価（学習ファイル：時間外総合実習）

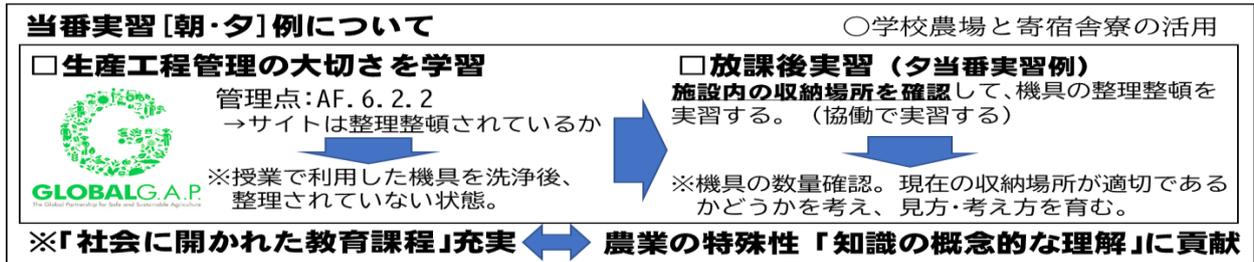
①現状の技術を理解しているか。③専門知識に触れ、内容を体験したか。



「自習時間の風景」

自習時間は、月曜～木曜まで20:10～21:00に計画されている。毎日課題が準備されており、ファイルに記入し毎週金曜日に点検し返却する計画で行っている。寮生は、各自部屋で行い、舎監教員が学習状況を必ず巡視・指導するようになっている。

【寄宿舍:菊水寮での活動成果】 当番実習・自習時間に分けて、教育活動の工夫や資格・競技面から考察する。



当番実習では、各科目の指導項目として位置付けられている、「農業生産工程管理 (GAP)」学習と関連付けた活動を展開している。1日の活動で利用された器具を整理整頓する時間帯に当番実習があるため、管理点AF6.2.2の項目「サイトは整理整頓されているか」を事前指導したうえで実習を行い、工程管理の大切さを体得している。(知識の概念的な理解) ※興味関心を得た生徒はグローバルギャップチーム加入へ

本校では、国際的な農業生産工程管理基準を学ぶ環境がある(通称:ギャップチーム)。将来の進路にむけて、管理規準を本格的に学ぶために、チーム加入する生徒が多くいることも魅力につながっている。

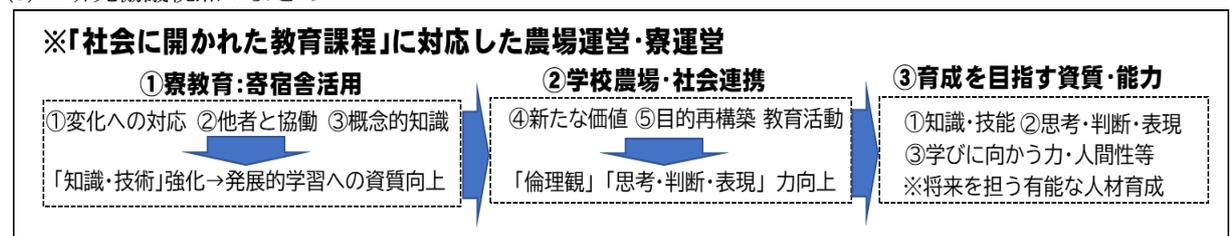


※自習時間の成果 視点:産業技術・協働・専門的知識の根本となる基礎基本の定着



自習時間では、すべての活動に共通する「基礎・基本的知識」の習得にむけた学習を行ってきた。そこで、コロナ禍で入寮できなかった時期と、入寮が開始された令和4年度からの校内農業鑑定競技の平均点と農業技術検定の合格率を比較した。平均ではあるが、日々の教育効果が見られている。

(5) 研究協議視点のまとめ



社会に開かれた教育課程は、育成すべき目的を一致させ、農場・寮が一体となり運営するスタイルもあり得る。「学ぶために、何を育てるのか」の視点を忘れず、学習環境の最大限活用を試みていきたい。

(6) 質疑応答

(名農) 学校でのいろいろな取り組みが増え、仕事の質も変わり、実習助手に求められているものがかなり変わってきている。その中で実習助手や技能技師に求めているものがあれば教えていただきたい。

(五農) 本校では、学科主任が主に内容や日時を決めて農場の先生方と協力して行っている。安心安全で先行的な農業実習は授業で行っている。また、それ以外の後片づけの実習なども臆することなくしっかり伝えてやってくださいとお願いしています。

2 指導助言 青森県立柏木農業高等学校 校長 浅利 成就

発表いただいた五農の越先生には、発表資料等の作成・準備にあたられ、改めて感謝申し上げます。テーマ、生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営・寮運営はどうあるべきか、「社会に開かれた教育課程」に対応した農場運営・寮運営の視点から発表していただきましたが、内容が、農場を起点として、生徒が実践的・体験的に主体的に行う教育実践ということ生き生きと学習活動や特色ある活動に取り組む様子が伝わってきました。

農業高校で非農家の子弟が多くなっている今、学校農場は、生徒にとっては「好奇心のタネ」「学びのタネ」が多く存在する大切な場所であり、そこをどのように活用するかで生徒の成長につながります。

われわれ農業高校は、実践的・体験的な学習を通して、「農業や農業関連産業を通じ、地域や社会の健全で、持続的な発展を担う職業人の育成を目指すことを教科の目標に示しており、いわゆる地域の担い手を育てるという使命があります。その観点から生徒のための農場づくりを各校さらに進めてほしいです。

今後は、生徒数・教員数減に伴い、部門内容や適正規模の模索が、各校で始まると思います。生徒と職員が減少している中で、同じ規模、同じ内容で運営していると、当然、先生方の負担だけが大きくなります。以前は、実習が単なる作業だった時代もあったが、将来を見据えて、持続可能な農場にしていくためにはどうすればよいかを学校全体で考えていく必要があります。

【 全体協議会 】（研修報告）

令和4年度高校生の就職総合支援プロジェクト事業「先進技能習得研修」

「食品微生物検査研修に参加して」

発表者 青森県立三本木農業恵拓高等学校 教諭 豊川 良昭

研修先：公益社団法人 日本食品衛生協会 食品衛生研究所

期間：令和4年6月23日（木）～24日（金）

内容：微生物の基礎、病原体などの適正管理、微生物同定実習、培養結果の判定など

所感：今回の講座の参加者は22名であった。多くが、都道府県の検査機関や薬剤師会検査機関などの職員が多く、臨床検査技師の有資格者が18名であった。そのため、研修のペースが早く、検査経験のない私は、実験について行くだけで精一杯であった。その一方で、検査機関での検定方法の情報交換が休憩時や講義中にも行われ、食品衛生上の検査がどのような方法で行われて、判定されているのか理解することができた。参加者が所属する組織で、技術指導や、課題への対応がどのように行われているのかも知ることができ、衛生検査についての理解を深めることができた。また、ペトロフィルムを使った生菌検査などは事前処理にかかる時間を大幅に軽減することができ、本校でも食肉加工時には十分に実施可能であると理解した。今後、この技術も伝えていく必要があると考える。大変有意義な講座受講であった。

【 講演会 】

演 題

「八戸にワイン文化を」～新しい価値を日本へ

講 師 八戸ワイナリー株式会社 社 長 亀 橋 進 氏

本講演会は、国内需要の縮減により地域の農業経営を支えている葉たばこの生産面積が減少し、地域経済に影響を与えている。そのことからワイン産業の創出による八戸市南郷地区における付加価値の高い農業を振興し地域経済の活性化についての内容となっている。

1. 八戸ワイン産業創出プロジェクトの概要について

八戸市南郷地区では、葉たばこの生産で農業経営を支えている状況であったが、生産量の減少により葉たばこに代わる転作支援が出来ないかということでブドウが栽培される事になった経緯がある。ブドウは他の作物に比べて栽培がしやすいということで全国的にも栽培されている。ワインというのは全世界、全国的にも作られているお酒ということで八戸にワイン産業を創設したいというきっかけでもある。日本酒は全国どこでも酒蔵があるが、ワイナリーは数少ない。青森県においても、下北ワイナリーしかないため、新たな産業としてブドウの栽培、生産に注力したいと思い、このプロジェクトに参画させていただいた。ワイン産業の分類構成といたしまして、ワイン用ブドウの生産は農業、ワインの製造はワイナリーなどの製造業、ワインの販売はイオンやヤマヤマなどの小売業となっている。また、八戸の鯖やイカ、お肉などの食とのペアリングを楽しめるということで飲食サービス業にも共有されている。さらに、ワイナリーは観光資源にもなるためいずれはワイナリーを巡るワインツーリズムも考えているため観光業に通ずると考えている。ワイン産業は様々な産業に通じているため雇用創出、雇用拡大にもつながるのではないかという思いでプロジェクトを進めている。八戸市内の葉たばこの生産推移を見てみると10年前と比較して経営体数や生産面積も減少している。販売額も約4割程度減少している状況にある。この減収分をブドウ栽培して農家さんの収入を確保したいと思いこのプロジェクトを始めた。

2. これまでの主な取り組み

ブドウ栽培するにあたって栽培適地であるのか土壌分析や日照時間と降水量を調査した。ブドウの産地である甲府市や東御市などの地域と比較すると遜色ないことが分かった。八戸市の農業振興センターでの土壌分析も問題なかった。その上で、ブドウの苗木の植え付けを始めた。八戸市と協力して行ってきた主な取り組みとしては、10年ほど前に南郷地区の農家へ18品種2,200本の苗木を配布し生産委託した経緯がある。当初は土壌に適している苗木を調査するために様々な苗木を植え付けて栽培していた。現在では、赤ワイン用にメルローやマスカット・ベリーA、白ワイン用にナイアガラやシャルドネの栽培に注力している。高級ワインの代名詞であるピノアールなども栽培しているが栽培方法が難しく苦労している品種もある。その他の取り組みでは、ワインの需要拡大を図るために八戸市とタイアップして様々なセミナーを開催している。

八戸市では地域おこし協力隊員を募集しており、その事業とタイアップを図りながら、将来ワインを生産したいという方々にブドウ栽培を手伝っていただいている。

ワイン産業創出支援事業にて補助金があったこともあり、現在までのワイン用ブドウの苗木の本数は約45,000本となっている。その中で平成30年ごろ大量に植えた時があり、大量に植えた事による失敗もあった。土壌改良を行わなかった事もあり失敗してしまったことが反省材料となった。

酒類製造免許を取得する事で最低製造数量基準というものがあり、毎年6キロリットル製造しなければならない。720ミリリットルのボトルに換算すると8,000本程度製造しなければならない。また酒税を納めなければならない。8,000本販売するとなると簡単なようでとてもハードルが高い。そこで創出特区の特例措置の認定を受けることで2キロリットルまで引き下げることが出来る。八戸市の特区認定は受けていたが、初期は6キロリットルで挑戦した。

八戸ワインの生産者の認定は、八戸ワイナリーと澤内醸造の2社であるが、1社追加する予定となっている。今後は七戸などのワイナリーを共同体として県南地域を盛り上げたいと考えている。

ワイナリーの整備状況では、澤内醸造がガレージワイナリーというハンバーガーショップが併設されているワ

イナリーを構えている。八戸ワイナリーは南郷地区に構えている。

八戸ワインを謳って売れるものは、八戸産のブドウを85%以上使用し、八戸市内で醸造されたものに限られている。

3. 八戸ワイナリーについて

日本酒は米が収穫できる場所ではどこにでもあるが、ワインはまだ歴史が浅く山梨県や長野県でも100年程度である。お酒の文化の視点からではワインは世界中どこにでもある。八戸市では、酒蔵も多く代表的なところでは「八仙」という日本酒もある。お酒は文化であり、様々な銘柄があってもいいのではないかと考えている。そこで今後はワインだけでなくブランデーやジンも製造したいと考えている。

ブドウ栽培は、主に八戸市の南郷地区であるが原産地認証が厳しく、八戸産のブドウを85%以上使用しなければならない。しかし、南郷地区のブドウだけでは賄えず、生産量が増えないため、隣町の南部町から買い入れる事もある。八戸産ブドウを85%以上使用できない場合は、青森ワインとして販売している。

イオンマレーシア店では、青森ワインの店舗も出店している。非常に売り上げも好評で大変嬉しいところである。世界では、八戸の知名度が低く、青森ならねぶたやリンゴなどで青森ブランドの知名度が高い。青森というブランドを用いて青森ワインとして「青森ナイアガラ」「青森スチューベン」という形で販売している。

八戸ワイナリーは南郷地区の道の駅「なんごう」の近くにワイナリーを構えている。現在の生産能力は年間2万本程度であるが、今後は5万本程度の生産をしていきたいと考えている。それに伴って、従業員の雇用拡大や農家の所得向上に繋がりたいと考えている。また、就労支援施設に通う人たちがワイン製造に携わることで農福連携を図っている。

【 部会の動き 】

自 令和5年4月
至 令和6年3月

- 令和5年 4月26日(水) 第1回高教研農業部会役員会 (於 青森県総合社会教育センター)
 5月11日(木) 第1回高教研理事会 (於 青森県総合社会教育センター)
 5月18日(木) 事務局長会議(研究紀要編集及び会計事務説明) (於 青森県総合社会教育センター)
 6月16日(金) 役員名簿並びに研究大会要項提出 (高教研事務局へ)
 6月29日(木) 第2回高教研農業部会役員会 (於 青森県総合社会教育センター)
 8月 9日(水)～10日(木)
 令和5年度青森県高等学校教育研究会農業部会研究大会, 令和5年度青森県高等学校農場協会総会:担当 名久井農業高校 (於 八戸プラザホテル)
 8月16日(水)～17日(木)
 令和5年度全国農業高等学校校長協会東北支部総会並びに研究協議会, 第62回東北地区高等学校農業教育研究協議会, 第21回全国高等学校農場協会東北支部大会:担当 庄内農業高校 (於 東京第一ホテル鶴岡)
 9月29日(金) 令和5年度研究紀要原稿提出 (高教研事務局へ)
 10月27日(金) 令和5年度研究大会報告書及び令和6年度研究大会計画書提出, 令和6年度研究大会講師謝金助成申請 (高教研事務局へ)
 11月29日(水) 第2回高教研理事会 (於 青森県総合社会教育センター)
 12月 1日(金) 農業教員技術研修会〔農業機械〕 (於 柏木農業高等学校)
 12月 8日(金) 第60回農業教育研究協議会 (於 国立オリンピック記念青少年センター)
 令和6年 1月25日(水)～26日(木)
 第3回高教研農業部会役員会 (於 青森県総合社会教育センター)
 2月 上旬 「研究紀要」第67集の発行 (高教研事務局から各校・各部会へ)
 3月15日(金) 会計清算書および証拠書類の提出 (高教研事務局へ)

【 関 連 事 業 】

- 令和5年10月28日(土)～29日(日)
 第33回全国産業教育フェア福井大会 さんフェア福井2023
 「発掘せよ!!産業人の原石、未来の輝石」

令和5年度青森県高等学校教育研究会農業部会役員

役員名	氏名	所属校名	役員名	氏名	所属校名
部会長	中村 豊	三本木農業恵拓高等学校	委員	佐々木 篤	三本木農業恵拓高等学校
副部会長	玉井 勝弘	五所川原農林高等学校	委員	加藤 佑也	五所川原農林高等学校
理事	浅利 成就	柏木農業高等学校	委員	鳴海 博方	柏木農業高等学校
理事	小泉 朋雄	名久井農業高等学校	委員	北上 守	名久井農業高等学校
			事務局	佐々木 篤	三本木農業恵拓高等学校
			庶務会計	宮本 哲郎	三本木農業恵拓高等学校
			編集委員	佐藤 匠	三本木農業恵拓高等学校

【 研究テーマ 】

紀要 (集)	年 度	研 究 テ ー マ	会 場	会員数 (一・ 二希望 計)	大 会 参加数	大会 発表者 数
—	令 和 2 年 度	新型コロナウイルス感染症拡大防止により中止	五所川原農林高校	151	—	—
65	令 和 3 年 度	全体研究 「高等学校学習指導要領教科農業」と「学習評価」 について（動画による解説）	三本木農業高校 三本木農業恵拓高校	142	37	0
66	令 和 4 年 度	◎主テーマ 生徒の「生きる力」を育む活力ある農 業教育の創造と実践 1 『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教 科指導および社会のグローバル化に対応した 農業教育、キャリア教育の推進はどうあるべき か』（生産経営・環境創造系） 2 『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教 科指導および社会のグローバル化に対応した 農業教育、キャリア教育の推進はどうあるべき か』（資源活用系） 3 『生徒の実践的・体験的な学習活動を推進する ための農場運営・寮運営はどうあるべきか』 （学校経営系）	柏 木 農 業 高 校	124	50	5
67	令 和 5 年 度	◎主テーマ 生徒の「生きる力」を育む活力ある農 業教育の創造と実践 1 『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教 科指導および社会のグローバル化に対応した 農業教育、キャリア教育の推進はどうあるべき か』（生産経営・環境創造系） 2 『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教 科指導および社会のグローバル化に対応した 農業教育、キャリア教育の推進はどうあるべき か』（資源活用系） 3 『生徒の実践的・体験的な学習活動を推進する ための農場運営・寮運営はどうあるべきか』 （学校経営系）	三本木農業恵拓高校	128	44	5